

クロストーク

実験・意見発表・討論・質問のページ

独自の改良を行い、平本式スーパーステレオ（HSSと略）と命名して現在まで研究を続け、ついに「超臨場感の世界」に到達し、システムを完成されたとのことでした。

スーパーステレオの概要

細目に関しては文末に私が調査した範囲での本誌掲載一覧を記しますので、興味のあるかたはバックナンバーなどを御参照ください。

「2ch ステレオの再生音とコンサート・ホールで聴く音との違いはどこにあるか」を“波動の存在形態”に着目し、位相速度と群速度を考察した結果、ホールでの群速度は距離により、周波数により大きく変化していることがFFTアナライザのデータ分析からわかった。ホールで大きく変化する群速度は、ホールが分散特性であることに起因する。分散特性は録音に記録されているが、2ch再生では再現できないことがわかった。そこでリスニング・ルームの分散特性を録音ソースに合わせて自由にコントロールする装置を付加する必要があることが判明した。

富成氏は「SSを初めて聴くと、その大きな空間的な拡がりに驚くが、それが何か空間的分散の仕掛けと想像されることが多いが、SSには時間分散の概念だけ存在する。空間分散はその結果出現するのである。このことは特に注意していただきたい。サラウンド方式とはこの点が根

HSS 超臨場感の世界を聴く

平本氏の努力に敬意

本誌2011年3月号「クロストーク」に掲載された平本修氏の装置を聴くことができましたので、概要を報告します。

スーパーステレオの経緯

“スーパーステレオ(略してSS)”は故富成襄氏が本誌1993/10月号に技

佐藤 勝

術発表された「2ch ステレオのための音場再生装置」の名称です。'95/12月号の本誌関連試聴会報告から'99/3月号まで幾度も本誌上で話題になったものです。

平本修氏は一番早く'92/11月号で本誌に実験報告をされ、その後

本的に異なる」と結ばれている。

装置の構成

メインの2ch再生装置はそのまま手で加えない。ここからLR2chのライン出力を取り出し、プロセッサを使って録音に含まれる分散特性から補助信号を作り、それを4個の専用スピーカから放出し、リスニング・ルームを強力に分散媒質化する。スピーカ2個はリスナーの前50cmくらいの両側に、残り2つは後方壁位置の、それぞれ鴨居の高さに4個すべて前方を向け、メイン2chスピーカと対向させる。4個のスピーカのメイン2chに対するレベル比はそれぞれ最適値があり、明らかに鳴っていると感ずるレベルでは過大である。

専用スピーカは後方壁用だけの2本に簡易化したシステムもあり、小規模な装置やラジカセに向く。

平本式スーパーステレオの構成

4個の位置はまったく同じであるが、さらに2個をメイン2chの位置の両側鴨居の位置に増設し、全部で6個にする。6個中の前4個をリスナーに向ける点がSSと異なる。

増設の2個は、以前の4個の前用と同じ信号を入れるが、レベルは異なる。メイン2chと6個のスピーカのレベル比調整の組み合わせは無限にあり、その最適値が超臨場感の世界となる。

6個のスピーカで分散特性は十分なので、部屋はデッドな造りとする。メイン・スピーカはリスナーから60度の角度で配置するなど。

HSS超臨場感の試聴

最初にSACDの2chモードで、ショスタコーヴィチ、ブルックナー、マーラーを聴きました。大編成のオーケストラで楽器の数は100近

くあるのですが、その1台1台がすべて聴き分けられるほど分解能が高く、微弱音や弦の柔らかさ、強大なfffまで難なくこなし、たいへん感動的です。超低音も深くホール全体に行き渡っている様が見えます。

生の楽器を1台鳴らしているときはよい音のはもちろん、楽器が多数集まってもうるさくなったり重苦しくなることはないという当然の結果となりました。

私にとってたいへん重たい曲で長時間聴くことは少ないのですが、ここでは、聴いていて楽しく、いつまでも聴いていたくなります。いちばん感じたことは、演奏がステージから自分の方に向かって、存在しているということです。「演奏家は聴衆に向かって演奏していた」ということを発見しました。そのためか演奏が聴衆にせまって、語りかけてきます。通常の2chではスピーカ面より後ろに演奏があり、響きは奥行として構成され、演奏はステージから向こうを向いて行われ、それを第三者として観覧させてもらう、という感じになっていたことに気がきました。

HSSではスピーカから前に出て、個々の楽器はきちんとロケーションされ、なおかつ響きは部屋全体に満ち溢れて、コンサート・ホールにいるように感じます。しかも6個のスピーカからの音はまったく聴こえません。

以上は、響きや音場に関してですが、音色に関してはメイン2chを色濃く反映し、メインの音色や明瞭さをそこねません。

平本氏はTADの38cmとセクトラルホーン+ドライバの2ウェイに

フォステクスのスーパートゥイータを付け、高音はミリ単位、中音はセンチ単位で前後位置を追い込んであり、それを自作の半導体DCマルチアンプでドライブされており、高分解能で鮮明な音色に仕上げられていました。

つぎにヴァイオリン、チェロ、フルート、弦楽曲、声楽等の小品を聴きました。システムの評価にはSACDの2chモードが最適とのことですが、小品はSACDの新譜が乏しいため、通常のCDをリッピングしたソースを使用しました。

通常のCDでも十分ですが、リッピングにより響きの正確さが明確になって効果が倍増し、より現実感を帯び、感動が増します。小品ではマルチマイクも併用されるため、録音によっては楽器の正確な配置再現は無理で、楽器が巨大化するものもありますが、音の質や音がスピーカの前に出ることや、ホールでの感じは大編成の時と同じで、演奏が迫ってきます。これも大満足でした。

3番目に、世界ではじめてのCDである「運命」と「新世界」をリッピングで聴きましたが、まったくすばらしく、文句のつけようがありません。当時は再生系が追いついていなかったことが判明しました。

4番目に、平本氏自身が録音された生録の中から小ホールと大ホールでのアマチュアのクラシック・コンサートを聴きましたが、これもよい音で、録音時の音を再現することをHSSの性能に反映させているとの事でこれで完成と感じました。

最後に私の手持ちの「あらえびすSP名曲決定盤」の復刻CDをリッピングなしのそのまま、また、1935年録音のフルトヴェングラー指揮ベ

ルリン・フィルハーモニーによる「ウェーバー：魔弾の射手序曲」を聴きました。当時のカッター録音で分散特性が録音に少ないせいか、前にはロケーションしませんが、モノラルでも前面いっぱいになり、快い針音もきちんと分離し、申し分のない演奏が楽しめました。

終わりに

再生装置でここまで行けばもう十分で、コンサートに行かずして、過去の名演奏がその時のホールで、しかも自分で構築したメイン2chシステムの好みの音色で楽しめるのですから、これが理想のオーディオと思いました。

「ラジオ技術」掲載関連記事

(年/月号/頁)敬称略

●技術発表

富成襄(93/10.97/11.89/2～8技術者は語る)

高橋和正(97/11.98/1/97p)

平本修(92/11.93/7.95/3.98/1.08/1.11/3)

本誌関連試聴会

①95/12/148p, 96/4/176p(佐藤).

②98/1/245p(飯田).

③98/2/168p(須賀).

④98/6. 故高島誠氏宅(高橋, 西谷, 浅石, 似鳥, 山下, 水野, 香取, 小川)

⑤99/3/172p(佐藤)

●試聴報告

①97/11/124p(是枝)

②98/2(大沢, 巳波, 杉沼, 香坂, 是枝 60p)

③98/6/165p(大沢)

④98/7/101p(木塚)

⑤98/8/55p/170p(木塚, 佐々木, 服部)